
灰色の吟遊詩人 ローレン

ひとつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の吟遊詩人 ローレン

【Nコード】

N1126Z

【作者名】

ひとつ

【あらすじ】

MMORPGで遊んでいたはず男は、気がつくると吟遊詩人として見知らぬ森の中に佇んでいた。一人人近いプレイヤーが召喚されたのは一つの惑星。宇宙の最前線。神が外敵と戦う為に創造した戦場だった。プレイヤーたちは、そして一人の壮年の吟遊詩人は世界を守る戦いに身を投じる。

本日に徐々に小説でも書いてみようと思い、練習がてらこちらで投稿させていただきます。

R15その他警告タグを登録していますが、ストーリー展開の縛り

を出来るだけ減らすためのものであり、性的表現や残虐表現などは出来るだけ排除する方針です。
1週間に1回の更新を目標とします。

はじめりのその前1（前書き）

はじめまして。拙い文章ですが楽しんでいただけると幸いです。また、誤字脱字、わかりにくい表現などご指摘いただけると助かります。

はじまりのその前1

そこは深い森の中、常ならば早朝の健やかな空気と飛び立つ鳥、巢へ帰る獣たちの空間。だが、今日に限っては騒がしい喧騒がその一角を支配していた。

色濃く茂った木々をすり抜けるように、初老の男が走っている。

朝露に濡れる葉に触れる僅かな音や、装飾の施された薄皮鎧に水滴が滴ることにも構わず姿勢よく走るその姿はある種の映画のようにも見える。

所々木々の根が張り出している森林の地面は決して走りやすい場所ではないはずだが、速度を落とすことなく一定の速度で走り続ける。驚いたリスが木の上へと避難していくのだが、それも目に入らないようだ。

なぜ男が走っているのか、その答えは男の後ろから迫りくるものにあつた。

振りかえった男の視界に映るのは醜い子鬼のような生物数匹。息を切らしながら走り、男の後ろを追ってきている。

子鬼たちを確認した男はうつすらと笑みを浮かべると、手にしていた小さな赤い石を後ろに軽く放り投げた。

石は子鬼たちの目の前に落ちると、爆発音と共に直径三十センチほどの小さな火球となり、爆発に巻き込んだ先頭を走っていた子鬼を痛みて立ち止まらせた。

しかし他の子鬼たちは怪我をした仲間を気遣うこともなく、若干速度を落としただけで一掃怒りを燃やし男を追う。立ち止まった子鬼も最後尾を来た派手な装飾の子鬼に小突かれ怒鳴られ、再び仲間たちに追いつかんと足を動かさしはじめた。

それからおよそ三十秒後、男性が辿り着いたのは森の中にぽっかりと空いた縦長の空き地のような場所だった。幅にして五メートル

ほど、長さも精々十五メートルほどのその空き地は、下生えの雑草など邪魔になりそうなものを排除した明らかに人の手が入っている人為的な空間。そこは戦闘の為に男とその仲間たちが用意した決戦の舞台だった。

空き地の中ほどまで来た男は立ち止ると、いつの間にかその手にもっていた背丈ほどの杖を構える。両端を金属で補強された真直ぐな杖で拍子を刻むように地面を突くと、驚くほど澄んだ音がまるで鉄琴のように鳴り響く。

男はその音を確かめると目を閉じ、そして朗々と歌い始めた。

“ 猛る心、止めることなく

燃え盛る炎、鎮めることなく

泣け、叫べ、怒れ、吼えろ

その身焦がす紅蓮の糧は

その身焦がす紅蓮の行く先は

唯一つ、汝が前に立ち塞がりし者の命

杖の刻む音に男の低く想い歌声が加わり、音楽がその空間を支配した。

吟遊詩人が使う 魔導詩 。それは歌に込められた力で聞いたものを、時には無生物でさえも導き操る特技の総称。

初老の吟遊詩人の歌う魔導詩が発動すると同時に、同じ道を皮鎧を着た男が走ってきた。その後ろには十匹ほどの子鬼たちを連れている。

吟遊詩人が小火球の小石を使い引き離れた子鬼たちを、別の集団を引き連れてきた皮鎧の男が拾ってきたものだ。

「今だっ！」

「せーのおー！」

皮鎧の男が広場に入り数歩走ったところで叫ぶと、空き地の左右に分かれ潜んでいた二人の女性が掛け声と共にロープを引っ張った。皮鎧の男の後ろ一メートル、今まさに斬りかかろうとしていた数匹の子鬼がつんのめり転倒した。その足元には広場を横切るように張られた一本のロープ。転がっていないのは、最後尾にいた派手な飾りをつけた二匹の子鬼だけ。

「よっしゃあ！ やっちまええ！」

「承知！」

「オツケー！」

「はいっ！」

「いきますよお〜！」

皮鎧の男が嬉しそうに叫びながら短剣を右の飾り子鬼に投げつけると、木々の間に隠れていた四人が広場へと躍り出た。

入口側から二人、吟遊詩人の後ろから二人。

入口側から踊りこんだ板金鎧姿の少女が両手で構えた剣を大きく振りかぶり跳び上がる。「ライジングスラッシュ！」

戦士の特技 ライジングスラッシュ が描いた黄金の軌跡が、短剣を左腕に受け怯んでいた飾り子鬼を袈裟切りに斬り裂く。

呻く飾り子鬼は呪文を唱えようと杖を掲げるが、再び飛来した短剣が杖をもつ右腕に刺さった。盗賊の特技 二突き による小型武器での二連撃は、敵の不意をつき意識を逸らす。

そして出来た僅かな隙。羽織袴に和風具足をつけた女性にはそれで十分だった。駆け抜けざまに抜刀、刃が残す銀光は子鬼の飾り建てた首を切り落とす、侍の特技 一閃 で止めをさされた飾り子鬼はガラスのように砕け散った。

だが、敵は一体ではない。

一切の攻撃を受けなかった左の飾り子鬼は呪文を完成させ、転がっていた数匹：八匹の子鬼が立ち上がるうともがく。

しかし、その動きの尽くは吟遊詩人たちの予想していたものだった。

た。

飾り子鬼の呪文は 火蜥蜴の尻尾 小火球を単体に叩きつける攻撃魔法だ。振り上げた杖の先に浮かぶ小さな赤い魔法陣から直径三十センチほどの火球が板金鎧の少女を襲う。

「させませんっ、アクアシールド!」

白いローブを翻した少女が唱えた呪文は白魔法使いの特技 アクアシールド 対火属性に優れる防御魔法だ。

「サリユ、頼んだよ!」

仲間呼びかけた板金鎧の少女の前に青い魔法陣が出現、迫る小火球と接触するや爆発が起こったが、その後には鎧をわずかに焦がしただけの少女が元気に剣を構えていた。

転んだ子鬼たちは立ち上がりつつしていた。

「悪いけど、もうちょっと待っててね。ミストヴェール」
黒いローブを来た女性は慎重に距離とタイミングを測り、のんびりと呪文を唱えた。黒魔法使いの特技 ミストヴェール 半径五メートルに濃い霧を発生させ、その場にいる全てのものの平行感覚を狂わす魔法だ。

立ち上がりつつしていた子鬼たちは、あるものは自らの上に乗っかっている同輩を突き飛ばし、あるものは下を踏みつけても立ち上がろうとするが再び転び同輩を下敷きにしてすっ転ぶ。効果時間は10秒とけっして長くはないが、それは貴重な時間稼ぎとなる。

そして吟遊詩人の男は油断することなく、戦鬪の推移を見守りながら歌を、吟遊詩人の特技 狂戦士の舞戦歌 を歌い続けている。

物理攻撃力を強化する代わりにあらゆるダメージに対する防御力が減少する両刃の剣は、

範囲内の敵味方関係なく効果を発揮する初期の魔導詩の中でもさらに使う状況が限定される特技だが、現状では劇的に有利な効果を発

揮っていた。

ミストヴェールが消える前に二匹目の飾り子鬼も倒れ、吟遊詩人が歌を止めた頃にはほとんど勝敗の帰趨は決していた。

「ふむ、なんとかなりそうじゃな」

暗い部屋の中、モニターに映る戦闘場面を眺めながら男は呟く。年のころは三十路すぎ、がっしりとした体をゆったりとした室内着で包み、PCの前に座っている。鋭い目つきをさらに尖らせゲーム用コントローラーを握っている様子は随分と楽しそうだ。今の咳きも意識せずに、つい漏らしてしまったのだろう。

「始まってすぐにゴ布林シャーマンを一体落とせたのが大きかったですね」

「ふふふっ、我らの連携の勝利ということだな」

「それもこれも俺がナイスな誘導で敵を連れてきたからだね！」

「はいっ、御苦労さまでした」

「地道に草刈りしたり、道を整備したり、したかいがあったわね」

「二匹目のゴ布林シャーマンも撃派したことで余裕ができたのだろう。男の咳きに反応して、楽しげに皆が話し始めた。」

はじまりのその前2

「ローレン殿、私がお引き受けする！」

「ありがたい、お願いするよカグヤ嬢」

黒地に桜の花びらが舞っている羽織を翻し、侍カグヤが吟遊詩人ローレンを攻め立てていたゴブリンの前に進み出る。地を滑るような動きにゴブリンは攻めあぐね、その隙を衝きローレンは安全に後退した。

残る敵はゴブリンが三匹。

味方も前衛に立っていた四人が手傷を負っていたものの重傷者気絶者はなし、戦線を突破されることもなく、ほぼ完勝と言ってよい状況だ。

こうしている間にも戦士アリスが両手剣で一匹を仕留め残りは二匹。戦闘開始から二分ほどでこの状況ならば、彼らには理想的な戦況だった。

「周辺に敵影なし！ 戦列はそのままオツケーよん」

いつの間にか姿を消していた盗賊ミウラが、魔力を使い果たし切り株に座り込んでいた黒魔法使いリリーの横に現れて報告する。

「ありがとうございます、ミウラさん」

戦士と侍がそれぞれ一対一の戦いを繰り広げている様子から目を離さず白魔法使いマリアーヌがミウラを労った。いつでも前衛二人を回復できるように備えている為、常に比べてその言葉は簡潔だ。

アリスとカグヤがゴブリンを圧倒していることもあり、ローレンは満足気に呟いた。

「やっぱりこの一体感が最高じゃな」

「ふふっ、その一体感を感じられるのも先輩を誘った私の手柄ですなのでお忘れなく」

「こら、誰が先輩じゃ！ ワシはローレンじゃぞ？」

「む、これは失礼した。ローレン殿」

狙ってなのか意識せずになのか素に戻ったカグヤをローレンがたしなめたが、謝りながらもカグヤの楽しそうな笑い声がイヤホン越しに聞こえる。まあ、自分の趣味に付き合ってもらっているのだ、あまり文句も言えないな…とローレンは苦笑するしかない。

ローレンはいわゆるロールプレイヤーだ。

ゲームの中でキャラクターを演じ、プレイヤーとしての発言は最小限に止める。

対してカグヤはゲームを攻略することを主目的としているらしく、キャラクターを演じることに拘りはもっていないらしい。

現実世界の仕事で先輩後輩関係の二人は、当然現実ではごく普通の一般人であり、名前も違う。

この後輩は常に先輩を立てていた。それは共にゲームをするようになってからも変わらず、ローレンのスタイルに合わせてロールプレイ重視でプレイしている。

なお、他の四名はリアルでのローレンの知り合いではない。

今回攻略している低レベル用シナリオクエスト『ゴブリン王の生誕』の為のパーティ募集で集まった仲間たちだった。

シナリオクエストとは2〜5話のクエストで構成される物語性の強いクエストだ。

通常は固定メンバーではなくてもクリアできるのだが、今回は6人全員が時間を会わせることが出来たので固定メンバーでのクリアを狙っている。

またアリス、リリー、マリアーナの3人がロールプレイヤーでありミウラもノリの良い少年だったため、ローレンとしては充実したゲームを楽しんでいた。そしてそれは他の五人も同じだったらしく、すでにこのシナリオクエスト攻略後の予定も話し合っているほどだ。

これもカグヤのお陰だな…最後のゴブリンが倒し、歓声を上げる仲間たちとモニターの中でハイタッチを繰り返しながらも、ローレンはしみじみとそんなことを考えていた。

はじめりのその前2（後書き）

ちよいと短いですが、切りよくこの辺で。

やっとシステム周りをちよっと書きましたが、ゲーム名も出てないのはご愛敬ですかね。

新しい日

冬特有の張りつめた空気の中、山間にあるその森には東の空に昇った太陽から日差しが降り注いでいた。

その森には動物たちの水場となつている泉がある。今も一匹の猫のような小獣が、水を舐めるように飲んでいる。

いつもと変わらぬ日常がそこにはあつた。

しかし…その時、水を飲んでいた小獣がウサギにも似た垂れ下がった耳をピクリと揺らし、顔を上げた。

なにかに頬を突かれている。

彼が暗い闇の中から浮上して始めに感じたのは、自らの頬をつつく感触。

次いで感じる眩しい光は、瞼を通してぼんやりと明りを感じさせる。そうか、自分は眠っているのだな…起きぬけの頭でそんなことを考えた彼は、ゆっくりと瞼を開いた。

「うっ、眩しい……………」

明るい日の光が思いのほか目に突き刺さり、急いで手を挙げ光を遮った。二度三度瞬きをするとやっと周りが見えてくる。

そこに見えたのはいつもの部屋の天井ではなく、広く枝を広げる針葉樹と青い空。え…と間の抜けた声を漏らし、体を起こしながら辺りを見回した。

「な…んで…外で…」

彼の目の前に広がっているのは豊かな自然。この辺りは針葉樹林らしく、細い葉を茂らせた背の高い樹木が並んでいる。すぐそばには細く小さい川がささやかに流れ、座り込んだ彼のすぐ横に目を丸くをしてこちらを見ている猫とウサギを合わせたような小動物がいる。

「……………つて、猫？」

みああ、自分が呼ばれたのが分かったのか、彼を見上げ嬉しげに鳴き声を上げる。

かわいらしい鳴き声と仕草がパニックに陥りかけた彼の心を穏やかに押しとどめた。

落ち着く為だろう、大きく息を吸いゆっくりと息を吐く。そうして数度深呼吸を繰り返した彼は、猫ウサギの喉元へ指を伸ばし撫でてやりながら聞いた。

「夢じゃないよなあ？」

みゃ〜ん、返事は実に可愛らしい声だった。

体感でおよそ3時間後。太陽が真上に来ているので昼くらいなんだろうな…ローレンは水を堅く絞ったタオルで体を拭いていた。

その足元で猫ウサギがのんびりと日向ぼっこをしているのだが、それにも気付かずローレンは困惑に包まれていた。

「ローレン…なんだよなあ」

呟きに反応して猫が鳴き声をあげたが、ああ、なんでもない…と手を振ると納得したのかまた日向ぼっこに戻って行った。

「こいつもなんでこんなに人に慣れてるんだろう…ってそれどころじゃないって」

目を覚ましてしばらく、ローレンが自分の異変に気付くのに大した時間は必要なかった。なにしろ、つい先ほどまで着ていたはずのジャージはどこかに消え、自分が身につけているのは青いシャツと白いズボン。その上に装飾の施された薄皮鎧を着込み、足元は皮のブーツ。

そしてなによりも、ローレンのすぐ脇に転がっているのは両端を金属で補強された杖『琴唱棍』、つい先ほどまでモニターの中にいた自分の分身が愛用している武器だった。

そこからは忙しかった。

思いつくままにこの手の話でありがちな行動を試していった。

その手の話、つまりはゲーム世界へと侵入してしまう話。初めてそのジャンルが生まれてすでに半世紀。一つのジャンルとして確立されており、ローレンも小説を好んで読んでいた。

そして分かったこと。それはこの世界はゲーム世界に限りなく近くはあるが、ゲーム世界ほど便利ではないということだ。

まずステータス画面を開くことが出来ない。

つまりレベルや能力値、特技や固有能力の確認が出来ない上、ログアウトボタンやGMコールは勿論、プレイヤー間で使えたメール機能やフレンド登録も使えない。

次に各種アイテムを保管し自由に収納できるアイテムボックスは作動してくれた。正直これはありがたかった。所持数に上限があるとはいえ、予備の装備や回復薬に換金出来そうな品物、そして現金とゲームで所持したものがそのまま手元に残っているのだ。現在いる場所がどこなのか、そもそもどんな世界なのかも分かっていないので、役に立つのかどうかも分からないのだが、裸で放り出されたかもしれない可能性を考えれば運が良いと思えた、思うことにした。肉体的には高性能なのは間違いない。実際の自分では出来ないような動きが可能だ。だが半面、ゲームのように疲れ知らずに走り続けることは出来ないし、ナイフで指先を切ってみたところ痛みがあまり血も出た。

死んで生き返れるのかは正確には分からないが、試す気にはなれなかった。

最後に、この世界で生きていくことを考えると重要になるだろう、吟遊詩人としての能力。手持ちの魔導詩の全てを歌い、数少ない戦闘特技も試してみた。

結果から言えば、特技は問題なく使用出来た。ただしかなり勝手が違う。この辺りは慣れていくしかないだろう。

そこまで考えたところでローレンの腹が鳴った。

「やっぱり腹も減るのか……そういえば何も食べていないなあ」

新たに判明したこの世界の法則を頭のメモに書きいれた。

目が覚めてから何度もこれが夢なら良いと思っていたのだが、次々に現実である可能性が高まってくる。

にあ？ いつものまにかローレンの足元に來ていた猫ウサギが見上げて一声上げた。

まるで慰めてるみたいだな…そう思い、ローレンは苦笑する。小動物にまで慰められるほど情けない顔をしているのだろうか？

思い起こしたのは、先ほど泉に映った自分の顔。それは初老として設定したローレンの顔と三十路過ぎの本来の自分の顔を足して二で割ったような四十代男性の顔だった。

新しい日（後書き）

さて、3回目の投稿になりますが、なやんでいるのは区切りをどうするべきなのか。次に引きを作るのがよいのか、キリよく終わらせるのが良いのか…悩みどころです。

出会い クロエル

噛みごたえのある燻製肉をナイフで薄く削いで口に入れ、奥歯で咀嚼する。食べ始めたときにはとても美味いとは思えなかったが、ゆっくりと噛み続けることで何とも言えない旨味が出てくることに気づき、ローレンはいつの間にか食事を楽しんでいた。

さまざまな特技を試して汗をかけたローレンは、汗を拭くと新たなシャツをアイテムボックスから取り出し食事にすることにした。

どうやら今の季節は現実と同じで冬なのか、あるいはいつでも寒い地方なのか、水タオルで拭いた体は寒さを覚えるほどで、初めは火を熾そうと思っていた。

しかし火を熾せる火精石を昨日の戦闘で使ってしまった為、火を熾す道具がなかった。

野外活動に慣れているものならば、なんらかの手段で火を用意できるのかもしれないが、都会に生まれアウトドアにさほど興味も持たなかったローレンに実行できるものがあるとも思えない。

それでも暖かい食事に未練が残っていたローレンだが、やけに人懐っこい猫ウサギまで腹を鳴らして切なそうな顔をしているのを見て諦めた。

無視すれば良さそうなものではあるが、知らない場所によくわからない状態で飛ばされてきたローレンにとって、目が覚めたときから傍にこの猫ウサギには何ともいえない愛情を感じていた。猫好きだったことも関係しているのかもしれないが。

ちなみにローレンの横では、猫ウサギも食事をしている。

肉に魚にパンと色々与えてみたところ、乾燥果物のイチゴを気に入ったようですっきりとした眼をして夢中で食べているのが愛らしかった。

ローレンが再び肉にナイフを差し入れたその時、茂みをかき分け

る音がした。

吟遊詩人であるローレンの聴覚はかなりの精度で周囲の音を聞き分けていた。食事中にもさまざま動物が、数十メートル内を動いているのが確認できていたほどだ。しかし茂みをかき分けた存在にローレンはまったく気づくことが出来なかった。

現れたのは軽鎧を着て剣を腰につるした十代後半の少女。黄金色の髪を背中を纏めており、長い手足と均整のとれた体つきが印象的だが、そのエメラルドのような瞳の力強さが初めの印象を大きく変貌させる。

「やはり人が居られましたか」

「…人がいると意外…かね？」

少女はしっかりと確認するように声をかけてきた。

ローレンは驚きを出るだけ押し隠し、返答を返す。言葉が古臭くなったのは、おそらくローレンの外見からかなりの年上だと判断した少女が改まった言葉を使ったので、それに合わせた結果だ。

少女は一礼しローレンに向かって歩いてくる。

ローレンから見て、初めは俊敏で美しい鹿だと思った。しかしこちらを目踏みするように、だが決して礼を逸しないその堂々とした態度は、彼女を獅子の如く見せている。

身目麗しいその姿は、むしろ可憐と表現するべきものだが、彼女の本質はその心にこそあるのだろうと思えた。

「突然申し訳ありません、すばらしい歌声が聞こえたものでつい誘われてしまいました」

「ほう、それは嬉しいことを言ってくれ。よろしければ可憐なお客様の名前を教えてくださいませんか？」

にこやかに笑いかける少女は実に魅力的だったが、ローレンにそれを楽しむような余裕はなかった。

情けない話だが、突然現れた美人が友好的に近寄ってくることに色気よりも危機感が刺激された。美人だから善人などという幻想は持ち合わせていない。

ローレンが三十数年を生きてきた経験からすると人を騙すような卑しい人間には見えない。だが、右も左もわからないこの世界での経験がどれほど有効なのか、自信よりも不安が強かった。

警戒しているのは少女にも伝わったのだろう、少女は困ったように歩みを止めた。

「名乗りが遅れ申し訳ありません。私はクロエル・フォーランド。少々気がかりなことがあり、この森を探索しておりました。こちらにお伺いしたのは真実、あなたの歌に誘われたからなのです」

困ったように弁明する少女を見てローレンの良心が痛む。精神年齢三十路のおっさんとしては子供を苛めてるような気がしてしょうがない。

「いや、事情があつてこちらも少々過敏になつておつたようだ。こちらこそすまんな。とはいえ、足音を潜めて人に近づくのは次から遠慮していただけるかね？」

できるだけ優しい口調で冗談っぽく釘をさしておく。少女は安心したようすで頷いてくれた。

「ワシはローレン。故あつて旅をしているしがない吟遊詩人だ…そしてこれは、猫ウサギ」

人間たちの様子も構わずイチゴと格闘している猫ウサギを抱き上げ、クロエルに紹介する。場を和ませるためだったが、効果は劇的だった。

「うわっ、かわいいです！ えっ、この子はあなたのペットですか！ うわわっ、撫でてもいいですか！！ ていうか撫でさせてください！！！」

一気にテンションが上がったクロエルは返事も待たずに駆け寄ると猫ウサギを撫で始めた。実に幸せそうにしているのだが、先ほどまで発していた威厳のようなものは霧散しており、ごく普通の…いや、むしろ普通じゃないほどのテンションで少女と化していた。

クロエルが正気を取り戻したのは、さんざん猫ウサギを撫でて抱

いて話しかけて、名前を聞いてきたので名前がないことを伝えたローレンに憤慨して自分で名前をつけようとして、悩みながら猫ウサギを撫でて抱いてついに根気よく耐えていた猫ウサギの抗議を聞いたローレンがクロエルと猫ウサギを引き離れたそのときまで続いた。

時間にして十分ほどの出来事が終わり、現在二人は向かい合って腰を下ろしていた。

クロエルに辟易したらしい猫ウサギは座っているローレンの膝の上で不貞寝している。

クロエルはその様子を羨ましそうに見ているが、嫌われたくはないのか自制して無理にそれ以上触ってこようとはしなかった。

「いやはや、クロエル殿はかわいいものが好きなようだな」

「うつつ、お恥ずかしいところをお見せしました」

どうやら理性も戻ってきたらしく、ローレンのからかいの言葉にクロエルは顔を赤らめている。

年相応のその様子を微笑ましく見ていたローレンは、彼女の為に話題を変えることにした。

「ところで先ほどクロエル嬢は気になることを言っていたようだが……」

姿を現したときクロエルは、やはり人が居られましたか、と言っていた。少々奇妙な言い回しであり聞きようによっては、人ではない可能性もあったという意味にもとれる。

ローレンとしては少々気になったので聞いた程度のことだったが、クロエルはその質問を受け、表情を改めた。

「ええ、実はそのことでローレン様にお聞きしたいのですが……」

真剣なクロエルに対してローレンが居住まいを正したそのとき、絹を引き裂くような悲鳴が森に響いた。

突然の出来ごとに二人は顔を見合わせたが、すぐに立ち上がり悲鳴の聞こえた方向に揃って走り出した。

初めての戦い、そして予感

悲鳴の主を見つけるのに左程時間はかからなかった。まず聞こえてきたのは甲高い囃し立てるような声だった。意味のわからない耳に障る騒音はローレンの知るものだった。

「ゴブリンが、獲物を追っているようだ」

「獲物、ですかっ」

全力で走りながら最小限の会話を交わす。

情報は少しでも多いほうが良いだろうとローレンは伝えたが、クロエルはより一層表情を堅くした。先ほどの悲鳴とゴブリンが獲物として追うものとなれば、当然それは…。

ローレンがそう考えている間にそれは見えてきた。一人の少女が十匹近いゴブリンに追われている。

「居ました！ 私はゴブリンを！」

「うむ、少女は任された！」

クロエルは剣を抜きつつゴブリンに駆け寄っていくと、走る勢いのまま二匹まとめて胴を薙ぐ。下段から斜め上へと逆袈裟に切り上げた細剣は眩い銀光を発し敵を絶命させた。

強い！ ローレンはクロエルの技量に驚きながらも、逃げてきた少女を腕を広げて受け止めた。

「我々は味方だ、助けにきた」

少女は背中や腕に多数の傷を負っていた。ゴブリンたちに遊び半分追いかけまわされたのだろう。いまだ恐怖に歪む顔は涙に濡れていた。安心させるように一度強く抱きしめると、強張っていた手足の力が抜ける。

「よく頑張ったな、後は我々に任せるがよい」

力の抜けた少女を木にもたれかけて座らせ、その前に立つ。

先制の不意打ちで二匹を倒したクロエルはその後さらに一匹を屠っていた。しかしさすがに全ての敵を引きつけておくことは出来な

かったようで、三匹がローレンと少女に向かってきている。

ローレンはアイテムボックスから愛用の吟唱棍を取り出すと両手で構え、敵を迎え撃つべく構えをとった。およそ初めての生身での戦闘だったが恐怖を感じる余裕は無かった。思うことはただ一つ。

「彼女には指一本触れさせん！ 私が守る！」

「まずは怪我を治さんといかん」

戦闘が終わり、すべてのゴブリンが絶命していることを確認した三人は怪我の治療を始めた。もっとも追われていた少女、ユリアは泣きながら礼を言うばかり、ローレンは薬草を持ってはいたが使い方が分からず、実際に治療を行ったのはクロエルだった。

戦闘は五分とかわからず終わった。クロエルが九匹、ローレンが二匹のゴブリンを倒したのだが、怪我はローレンが最も多く次いでユリアであり、クロエルに関してはかすり傷が数か所出ているだけだった。

ローレンが動けないユリアを抱き上げ泉まで戻るとクロエルが自分とユリアの傷と体を洗った。その間にローレンは薬草を潰してお

く。
そして女性陣が薬草を付け包帯を巻いている間にローレンが傷と体を洗い、最後にクロエルの処置を受けた。

その間にユリアも正気を取り戻し、傷の手当てが終わるころにはそれぞれの事情も話し終えていた。

助けた少女、ユリアはこの森を抜けてすぐの村の住人だった。森の外周部は危険な獣もほとんど居ないため、栗を採りに森に入ってきたらしい。

しかしいつもなら安全な、森に入ってほんの十五分ほどのところでゴブリンを発見。見つからないようにとしているうちに森の奥ま

で入ってきてしまい、結局ゴブリンに追われる羽目になったらしい。「そんな場所までゴブリンが…、私は森の奥にゴブリンが住み始めたとの話を聞き確認に来たのですが、本当だったようですね」

難しい顔で呟くクロエル。なぜ彼女がそんなことをしているのかというと、彼女がこの地方の領主の娘だからとのことだ。

ユリアが正気に戻り、クロエルをまじまじと見つめ「お嬢様!？」とたいそう驚いたので発覚したのだが、実はローレンはそれを予測していた。クロエル名乗った家名に覚えがあったのだ。もっとも領主の娘がなぜ一人？ と別の疑問もあつたが、結局聞きそびれてしまった。クロエルの強さを目の当たりにした直後だったので、その強さに納得した部分もあるだろう。

ちなみにローレン自体もなぜこの森に来たのかと聞かれたので、なにものかに魔法かなにかで飛ばされてきたらしいと答えておいた。ユリアは納得して同情してくれたが、クロエルは妙な顔をしていった。

だが、それよりもローレンには気になることがあり、それを確かめる為にはユリアがいるのは不都合だった。戦えないものを危険にさらすわけにはいかない。ありがたいことに村までは一時間もあれば戻れるらしいので、三人はまずユリアの村へと向かうことにした。

悪夢、そしてクロエルの思い（前書き）

なんだか説明っぽくなってしまい納得できませんが、今はこれ以上無理なようなので止まるようは進めることにします。少々読みずらいかと思いますが、申し訳ありません。

悪夢、そしてクロエルの思い

夜の街、雑多な人々が交差点を行き交う。

それはいつのも光景。

点滅する信号を見た人々が小走りに横断歩道を渡り、客待ちのタクシーはまるでリピートする映像のように駅前には並んで人を乗せ去っていく。家路を急ぐサラリーマン、これから出勤する風俗嬢、人目も憚らずキスを繰り返す恋人たちは高校生だろうか。

空に美しい三日月が浮かんでいるというのに、見上げる者は滅多にいないだろう。街の明かりは煌々と輝き、より明るく人々の目を誘っているのだから。

それが何時もの光景、そのはずだった…。

今、男が走る夜の街は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

至る所に死体が転がり、剣戟と銃撃、悲鳴と怒号、享楽と悲嘆、さまざま事象と感情が入り混じり、敵も味方も混沌とした混乱の中、驚くほど簡単にいくつも命が消えていく。

死は生と等しく人に訪れる運命。

いつか本で読んだ言葉、それを嫌というほど思い知った。父母の死を間近に見た経験がなければ泣きわめき胃液を吐いて逃げ惑っていたかもしれない。

いや、むしろただの民間人でしかない男は逃げるべきだったのかもしれない。しかし、テレビに映し出された現実とは思えない凄惨な光景に彼女の姿を見て、なにかに突き動かされるかのように男は走り出していた。

だが男は物語の主人公ではなく、魔王を倒す勇者でもない。

辿り着いたその場所で待っていたのは、剣に貫かれた一人の女。

それでも彼女は手に持つ拳銃で剣を持つ怪物を撃ち倒した。そして血を吐き…倒れ伏す。

男は一刻も早く辿り着こうと必死で走るが

その距離は一行に縮まらない。なのに血を吐き倒れる彼女の唇がわずかに動いたことがはつきりと分かった。楽しげに歌うように喋るいつもの彼女とはちがう、悲しさに彩られた声が聞こえてきた。

「…先輩…」

みゃー、頬を舐めるザラリとした感触とその鳴き声は、今日一日ですっかりおなじみになった感触だった。

ローレンが目覚めると目の前に猫ウサギが居た。

大きな目で顔を覗き込む猫ウサギは、眠りから覚めたローレンをじっと見つめている。

長椅子に座ったまま眠っていたローレンは堅くなった体をほぐす為に軽く伸びをする。

「うむ、どうかしたかね？」

「お休みのところを申し訳ありません。話しが纏まりましたので…」
猫ウサギに話しかけたのだが、答えは以外なところから来た。

扉を開けた姿勢のままクロエルが控えめに声をかけてくる。

「父への援軍の要請はすでに出発しました。今日中には到着するはずです。森への偵察も信頼できる獵師がいましたので彼に頼み、行ってもらっています」

「ふむ、よそ者の推測でしかないというに…ありがとうございます」

「いえ、事実だとすれば大事です。出来ることはしておかなければなりません」

「して、避難のほうはどうかね？」

「そのことなのですが、この村の方々は避難に応じてくださいます。ただ…」

クロエルが言葉を濁らせたが、ローレンが無言で続きを促すと話しを続けた。

「老人や子供が多いため、もし本当に来るのだとすると非難が間に合いそうにありません」

それはローレンがクロエルに相談したときに可能性を示唆されていたことだった。

万が一を考え次善の策も二人で考えはしたが：汗で張り付くシャツの首元を開き空気を入れながら、聞き続けるローレン。

「ですので、砦跡へ避難するということがつきました」

「そうか：危険には違いないだろうが、備えがあるだけ良いと考えるしかあるまい」

「はい、それで私はこれから隣村にも避難を促しに行つてきますが：ローレン様は：その、いかがなさいますか？」

「私はこの村の方々とともに砦跡に向かうとしよう。休ませてもらったので体もだいぶ良くなったようだ」

面倒事をすべて押しつけてしまったな、申し訳なさそうに苦笑を浮かべるローレンに、クロエルはなにか言いたそうに逡巡したが、結局はいとまを告げ部屋を出て行った。

ローレンが休んでいた小屋を出たクロエルは遠く見える森を睨みため息をついた。

みゃー、後を追ってきた猫ウサギがその足元に体を擦りつけ一声鳴く。

その愛らしい様子に頬笑みを浮かべたクロエルが猫ウサギを抱き上げる。

「ねえ、なぜローレン様はあんなにも自然にこの村を守ろうとしてくれているのかな？」

尋ねられた猫ウサギは首を傾げ一声鳴いた。

「普通、冒険者や旅人は自分の利益にならないトラブルと嫌う。ましてや命の危険が大きいとなれば、それなりの対価がない限り動くとはしないわ」

くわしくは聞いていないが、ローレンはおそらく冒険者か旅人だ

ろう。

十分な教養を受けたもの特有の語り口などからみるに生まれや育ちは悪くはないはずだが、貴族社会では下賤の者と侮蔑される対象だ。

それがこの世界の常識。国という後ろ盾を持たない彼らは、よほど名前の通った一部のものを除き、その本質はただの荒くれ者にすぎない。犯罪者と変わらないと断言するものも少なくない。

事実、クロエルがいままで出会ってきた冒険者たちは理に敏くずる賢いものが多かった。

そんな中で会ったローレン。

森で聞こえてきた様々な歌。力強く、時に繊細に、心揺さぶられる歌声に引かれ始めて彼の前に出て行った時、正直に言って驚いた。明らかに冒険者と分かるその姿からは想像出来ない、落ち着いた低い声。切れ長の鋭い目は微笑むと印象が大きくかわり、暖かい眼差しを投げかけてくる。今腕の中に抱いているこの猫ウサギを見て取りみだした時も、さりげなく話しを変えようとしてくれた。

そしてなによりも、ユリアの悲鳴を聞いた時に迷うことなく助けに走り、今また誰に頼まれたわけでもないのに自然にこの村の人々を、守ろうとしている。今日初めてあつた人々を、なぜそこまで自然に助けようとするのか、命を賭けられるのか。

なーお、猫ウサギが舌を伸ばしクロエルの頬を舐めた。その顔は自慢げに笑っているようにクロエルには見えた。

「なんで貴方がそんなに偉そうにしているのよ、ローレン様は別に貴方のご主人さまってわけではないのでしょうか？」

笑いながら喉元を擦ってくるクロエルに猫ウサギは抗議の声を上げる。

「ふふつ、さてそろそろ私も負けないうように一働きしてくるわ。私がいけない間はローレン様を頼んだわよ？」

ひとしきり猫ウサギと戯れたクロエルは一声かけるとその場を後にする。やるべきことはたくさんあるのだ。

その後ろ姿を猫ウサギが一声鳴き見送った。みゃおーん。

生き残るために

フォーランド領。緑多く温暖な地方にあるこの領地は、その七割が草原に占められており農業と牧畜が主たる産業だ。

残りの三割は森林となっており森の恵みも多いが、ときおり現れる妖魔への対策も求められる為、特別に裕福な土地柄ではない。

また領地は決して広くはないが、ここ百年以上大きな災害にあうこともなく安定した暮らしを領民たちに与えていた。

なお武を尊ぶフォーランド家の家風の通り、精強な兵を持つ事でも有名だった。

夕暮れの小高い丘、赤く染まった大地を人々が列をなして進んでいる。

向かう先には幅三十メートル奥行き二十メートルほどの長方形の建物がある。高さは五メートルほどだが四隅に十メートルほどの塔が建っている。さらに建物から十メートルほど離れた周囲には木を組んで作った高さ二メートルほどの柵。

そこが近くの村の者たちから砦跡と呼ばれている場所だった。

様々な物資を運び入れる人々、砦跡を囲む柵を修繕し堀に水を通す準備に走り回る男たち、かつて妖魔との戦争で使われた砦はひさしく放置されていたはずだが、早くも本来の姿を取り戻し始めていた。

もつともその素早い復旧には理由もある。

近くの村の子供たちが毎年夏に集められ、簡単な護身術や野外活動のイロハを教える場として使用されていたのだ。その際、大工仕事の練習がてら大きな破損などを修繕していたらしい。

クロエルがこの砦跡を使うことを考え付いたのも、村人たちが避難することに同意したのも、砦跡がまさに砦としての機能をまだ有していると知っていたからだった。

「よし、これで最後だ。がっちり組み立てるぞ！ぬかるなっ！」
立派な髭を蓄えた老人が腹に響くような声で檄を飛ばすと数人の男たちが声を揃え気合を入れた。それぞれが大工道具を手に木材を組み上げていく。

砦の周りではそんな光景がいくつも見られた。誰も生き残る為の努力を怠らずに働いている。

それは死が隣り合わせの世界で生きているからこそ持っている強さ。

「日本で同じ状況になっても、こうはいかんだろっなあ」

避難を始めてまだ5時間程度だというのに逞しく働く人々を、ローレンは離れた場所から頼もしく見ていた。

そして振り向くと遠く森が見える。

「さて、私も自分の仕事をするとしようか」

ローレンは構えた吟唱棍をゆったりとした拍子で地面へと突き立て始めた。

“山を越え、丘を渡る風

雲を裂き、降り注ぐ光

震えるような息吹は歌うように

空を目指す想いを奏で続ける

その響きは神々へ、その思いは神々へ

命の輝きは山を越え、雲を裂き

きつと届くだろう”

「おや？これは…？」

「へえ、なかなかの歌いっぷりじゃないか、誰が歌ってるのかしらねえ？」

風に乗って聞こえてきた歌。忙しく砦の修繕に働いていた人たちは、皆がそれに気がつき、耳を澄ます。

そしてその歌を、魔導詩を聞いていたのは人だけではなかった。冬の寒さに枯れていたローレンの足元の枯れ草が草原の緑へと変わっていく。

「なんだありや……」

「あのオッサン魔法使いだったのか」

皆の見ている前でローレンの歩く周囲に次々の緑の絨毯が敷き詰められていった。

そんなあつけにとられる光景を見ていた人々の内、一人がぼつりと言った。

「でもよ、草を生やしたからなんだっていうんだ？」

「なにつてそりや……なんなんだ？」

答えられる者はなく一斉に首を傾げた一同だったが、この1時間ほど後、当のローレンから草の使い方を聞くと、その単純さに効果があるのかと再び皆で首を捻ることになった。

それからおよそ5時間後。

すでに夜も深く砦の各所に灯火がつけられ、塔の上や柵の内側など数か所に見張りが立っている。

砦の中は多くの女性や老人、子供など戦うことの出来ないもので占められ、男たちは最後の打ち合わせの為入口の大扉前に集まっていた。灯火用の油の匂いが立ち込めるその場には五十人ほどの村人が集まっていた。

主に十代から五十代までの男が多いが、若い女や頑健な老人の姿も散見される。

クロエルとローレン、さらに村のまとめ役である数人の男たちは最後の打ち合わせを行うため彼らの元に向かっていた。

「なんとか間に合ったようだな」

「はい、皆よくやってくれました」

「そうだな、あとは我々が彼らの努力に報いる番だ」

「勿論です。必ず生き残りますよ」

皆が集まった村人たちを見て呟いたローレンにクロエルが答え、村人たちの前へと進み出る。

あるものは不安げに、またあるものは戦いを前に高揚した様子の村人たちの前へ一人立ったクロエルに人々の目が集まる。それを十分に意識しながらも、クロエルは一人一人の目を見るように皆を見回し、そして軽く片手を上げた。

すると、いままで囁くように話しあっていた声がピタリと止み、静けさやっってきた。

なるほど、人の上に立つ人間というのはこういうものか、ローレンが心の中で呟いたとき、クロエルが口を開いた。

「まずは皆の苦労を労わせてもらいます。御苦労さまでした。我々は生き残るための準備を無事に終えることが出来ました」

ゆっくりと話し始めたクロエルはそう言って微笑んだ。大輪の花が咲いたような、華のある笑顔だ。しかし、柔らかな眼差しはやがて力を増し、人々は視線を放さなくなる。

「しかし、まだ足りません。これから我々は命を賭けて戦うこととなります。そこを乗り切って初めて、我々は自分を家族を仲間たちを守る事が出来るのです」

一度言葉を切り、集まった村人たちを見回す。クロエルを見つめる男たちに迷いは見えない。それを確認し大きく頷く。

「ではこれより作戦を説明します。全て理解する必要はありません。ただそれぞれの役目を全力で果たしてください。そうすれば、我々は勝てます！」

クロエルが力強く言い切ると村人たちに熱気が溢れる。勝利を信じさせる力がその言葉にはあった。

だから直後にクロエルが振り向き確認するような視線を向けてきたのはローレンにとって意外だった。だが、どれほどしっかりといようと彼女はまだ十七歳の少女なのだ。人の命を背負うことに戸惑いや恐れがあつて当然だった。

「せめて私に出来るだけのことはしてやらなければな」

ローレンは小さく呟き、クロエルを安心させるために笑顔で頷いた。

生き残るために（後書き）

あまり書いたことのないシチュエーションなのでなんとも…難しいです。

開戦

時刻は深夜0時を回っているだろう。いくつもの松明で明るく照らし出された砦から遠く、暗闇の中に蠢くものたちがいる。

「焦らしてくれるな」

砦の右前の見張り塔の上、二十代半ばの獵師ジャンが呟いた。その言葉とは裏腹の落ち着いた態度から苛立ちは感じられない。熟練の獵師ならではだろうか。

ローレンは瞑っていた目を開けジャンの横に並んで立った。

「いつそのこと夜明けまで焦らしてくれれば助かるのだが…さてはて」

「そうだな、夜明け頃には援軍がくるんだろ？」

「うむ、クロエル殿の見立てに間違いはなかるう」

ゴ布林らしき影が現れたのは二時間ほど前のことだった。それからこちらを伺うかのように、姿を見せては引くを繰り返している。「まったく、ローレンのおっさんが居てくれて助かったぜ。何にも知らずに村に居たらとつくに全員やられてたかもな…」

「私はたまたま過去にあつたゴ布林の大発生の時のことを思い出したにすぎんよ。避難の手はずを整えたのはクロエル嬢で、ゴ布林どもの動きを偵察し、直前まで危険を冒していたのはジャン殿、貴殿だ。それに…」

ローレンは先ほどまでの情景を思い出し、楽しげに笑う。

「この砦の準備をした村の方々も素晴らしい手際だった。この辺りに方々は皆こんな多芸なのかね？」

「まあ妖魔がたまに出る土地だし、辺境守備の経験者も多いからな」
誇らしげに語るジャン。ローレンが見るに今この砦でクロエルの次に腕利きなのは間違いなくジャンだろう。

そもそも単独で森に入り偵察、ゴ布林ロードの元に百匹を超え
るゴ布林が集っていることを確認し報告に戻ってくると、再び夜

の森に戻りゴ布林軍団がこの砦に向かってくるまで見張っていたのだ。

そして砦に戻ってくるなら休むことなく見張り塔の上から監視を続けている。底知れない体力だった。

対してローレンのやったことと言えば、シナリオクエスト『ゴブリン王の生誕』によく似た状況 通常四匹程度で行動しているはずのゴ布林が、十匹近い集団で行動している。人里に近い場所まで行動圏を広げている。付近の村でゴブリンの出現が噂になっているなど からゴ布林ロードによる百〜数百匹の集団略奪移動がおこることを予測しただけだ。それだつて万が一の話のつもりで、実際に当たつていたのはマグレでしかない。

ちなみにゴ布林ロードの目的はフォーランド領東の边境、未開地帯にある暗闇の森に誕生しているはずのゴ布林キングに合流することであり、略奪はあくまでも次いでにすぎない。ローレンとしては運が良ければ村や砦を無視して行つてしまふかと思つていたのだが、そこまで甘くはなかつたらしい。

監視していたジャンによると無人になつている近隣の村二つを略奪したのち、斥候を放つて砦を見つけたらしい。

砦では明りを付けているので見つかるのは当然として、行動から見るに逃げた人間を襲う気であるのだろうと思えた。

なおゴ布林軍団の陣容は、ゴ布林ロード一匹、ゴ布林シャーマン五匹程度、ホブゴ布林二〜三十匹、ゴ布林百匹以上とのことだ。これもジャンの偵察結果なので、彼の有能さにはローレンも驚くしかない。

「ふむ、せっかくの皆のがんばりに報いる為にも勝たねばならんな。援軍がくるまで時間を稼げれば、こちらの勝ちだ」

「その為にも相手が動かないでいてくれれば一番なんだけど…さすがにそこまで甘くはないかよっ！」

三日月が照らす草原。ジャンの目にはそこに現れた大量の人影が見えている。急ぎ手元の警鐘を打ち鳴らすと、一瞬遅れ砦の各所で

人々が動き出す音が聞こえる。この見張り塔にも上がってくる足音が響く。

「敵は？」

「正面が一番多いが左右にも広がってんな」

「ふむ、包囲してきたか…ここはお任せした」

ローレンとジャンは手早く言葉を交わす。

そして弓を手に上がってきた男達と入れ替わるようにローレンは下に降りていく。

その後ろ姿を見送ったジャンは上がってきた二人の男にも敵の情報を伝えると、自らも弓を構え襲撃に備えた。

ジャンがふと下を見るとローレンとクロエルが柵の手前まで出て、何事か話しているのを見た。予定通り二人は柵を守って戦うらしい。

「伯爵んとこのお姫さまに今日初めて会ったオッサンまで命かけてくれてんだ。俺らもしっかりやんなきゃな」

隣に並んだ普段は猟師をしている男がやはり下の二人を見下ろして言った言葉に、ジャンはしっかりと頷き返した。

「ああ、ゴブリンなんざさっさと倒してやろうぜ」

開戦（後書き）

…開戦してないような気がしなくもない…

開戦2

砦の門が閉められ、門が落ちる重い音が鳴り響くと、室内には僅かながらも崩れた建材が埃のように降ってきた。

柱や外壁、天井は補強され、使用に十分な耐久力を持つとはいえ百年以上前の建築物。

その事実が守られている者たちに不安を植え付けていた。

承知の上で皆が守る為の戦いをしている。分かっているにしても不安要素を見つけ、さらに不安感を増していくことを止められない。

ユリアは非戦闘員を集めた部屋で不安に怯え泣いている子供たちを励ましながら、そんな空気と戦っていた。

警鐘が鳴り、扉が閉められたということはこれから戦いが始まるのだらう。

「この砦は決して広くはない。戦いが始めれば否応なくその音はユリア嬢やお子達に聞こえてくるだらう。…しかし、安心してほしい。君たちは我々が、私が必ず守る。」

僅かに聞こえてくる妖魔たちの叫びは胸の中を氷の塊のような恐怖で冷やすが、同時に聞こえてきたローレンの歌声が彼と交わした約束を思い出させた。

「私の国では約束する時にこうするのだよ。」

ユリアの右手の小指に宿る熱は胸の中の氷を溶かす。そして彼女はその熱を少しでも不安に怯える人たちに分け与える為、怪我をした体をおして一人一人に話しかけ、時に手を取り続ける。

戦いは砦の中でも始まっている。

砦に灯る明りが届かない距離に、一つ一つと増え始めた人影が砦の周囲を完全に囲んだその時、堅いものを撃ち合わせる音が響いた。

そして訪れた一瞬の静寂は、耳触りな嬌声に埋め尽くされる。

雄叫びを上げ押し寄せてくるゴブリンは、怒涛の勢いであつといふ間に草原を埋め、皆に向かつてきた。

「まだだ！ まだまだ！」

砦の上からジャンの叫ぶ声が聞こえた。柵からの距離はすでに五十メートルを超え、矢が十分に届く距離ではあるが初めの一射を決定的なものにするべくその時を待つ。

残り四十メートル。怒涛の勢いで走りくるゴブリンに耐えきれず一人が矢を放つ。放たれた矢は放物線を描きゴブリンの右肩に突き刺さるが、興奮状態のゴブリンは血を流し口から泡を噴きながらも走ることを止めない。

残り三十メートル。柵の中で武器を構えた男達が生唾を飲み込み緊張から解き放たれんとした誰かが矢を放とうとしたその時、ローレンが叫ぶ。

「皆の者、よく耐えた！ 我が歌を聞けい！」

“ 猛る心、止めることなく

燃え盛る炎、鎮めることなく

泣け、叫べ、怒れ、吼えろ

その身焦がす紅蓮の糧は

その身焦がす紅蓮の行く先は

唯一つ、汝が前に立ち塞がりし者の命

地を打つ吟唱棍が鳴らす澄んだ拍子に合わせてるように、心湧き立たせる歌声が響く。

次いで響いたのはクロエルの号令。

「弓、構え！」

命じること慣れたその号令にとっさに弓を構えなおす男達。ゴブリンはもう其処まで迫っている。

残り十メートル。これから始める殺戮に心奪われていたゴブリン

の内どれほどが、自らの歩む地面が枯れ草から若草へと変わったことに気付いただろうか。緑の絨毯に達したゴブリンは次々に足を捉えられ体勢を崩す。

彼らの足を捉えたのは地に生えた草を結んで作ったごく簡単な罠だった。足を引っかけたゴブリンの何体かが転ぶ、ただそれだけの仕掛け。もしゴブリンが集団で全力疾走していなければ…。

実際には転んだあるいは体勢を崩した仲間引っかけ動きがとれなくなるゴブリンが続出した。

無論そこを抜けて近づいてくる者たちも少なくない。だが緑の絨毯の上には棒立ちになったゴブリンの集団がいる。

「目標に向かって…撃て！」

タイミングを見計らい叫んだクロエルの号令に従い数多の矢が固まっているゴブリンたちに向けて放たれた。

砦の防衛戦の為に用意出来た矢は二つの村を総ざらいしてやつと五百本を超える程度だった。数だけ見ればかなり多く感じるが、実際には心元ない数だ。矢尻を持たない木を尖らせただけの矢を急ぎ作りはしたが、それも矢羽が足らず二百本しか用意出来ていない。

無駄遣い出来ない為、戦闘全体で弓を使うものは選抜され各塔にそれぞれ三人配された合計十二人に絞った。敵を倒すことを積極的に行うのは彼ら弓隊の役目となる。

だが、戦闘開始時の罠を有効に使う為にローレンとクロエルは柵内で防衛に当たる四十四人の内半数に弓と五本の矢を持たせた。そしてその五本の矢を全て、緑の絨毯の上で固まっているだろう敵に向けて撃たせることにした。

目の前の敵に気を引かれると罠に掛りやすく、知能が低いのでアキシデントへの対応能力が低い。ゴブリン族の特徴から考え、ローレンがゲーム内で使った罠を大規模にした作戦だが、一種の賭けでもあった。

一射で放たれる矢は総数三十四本。四方に向けて放っているのだから一方には八〜九本。

五射放たれば総数百七十本、一方向に四十〜四十五本となる。

弓矢による一方的な攻撃の間、ローレンは魔導詩 狂戦士の舞踏歌 を歌った。

魔導詩により攻撃力を増した矢は、防御力を減らされたゴブリンの体を次々に貫く。

結果としてゴブリン及びホブゴブリンを三十体以上倒した。生き残ったとはいえ負傷した個体も多い。

戦闘開始直後、ローレンたちは戦いの主導権を握ることに成功した。

開戦2（後書き）

この時間の更新はどうなんだろう？　と思いつつ、そこまでもった
いぶるものでもないと感じ入ったり…。

防衛

砦では柵を挟んでの戦いが続いた。

「おい、柵が破られるぞ！」

堀を越え柵に取りつくゴブリンを熊手や天秤棒で突き落とししていた男達の隙を衝き、ホブゴブリンが柵を破壊するために背丈ほどもある棍棒を振りおろす。

柵は長い木材を地面に埋め込み、高さ二メートル、横木を格子に組み合わせたものでそれなりの強度がある。ゴブリンが柵を揺さぶったり棍棒で叩いたりしても、壊れる様子はなかった。

しかし戦いが始まりすでに三時間近い。敵も学習したようだ。隙については怪力のホブゴブリン数匹が一か所に集中して攻撃を仕掛けてくるようになっていた。結果数か所に大穴が空き、今もまた半ば折れ掛つていた柵が二匹のホブゴブリンの体当たりで破壊された。熊手に腹を突きさされるのも構わずに体当たりをしたホブゴブリン二匹は勢いのままに地面に倒れたが、すぐさま頭を振って立ち上がるうとしてる。

「邪魔だ！」

一喝し二匹の間に飛び込んだローレンは左右に弧を描くよう吟唱棍を振り回し、立ち上がる為に中腰になっているホブゴブリンの頭を強打、吹き飛ばす。左右に弾かれ再び地に倒れた二匹には近くにいた男たちが容赦なく止めの攻撃を加えていった。

「どけどけどけ〜！」

続いて車輪の音をけたたましく鳴らして三人の男たちの押す荷車が走ってくる。すでに柵に空いた大穴の前から退いたローレンの目の前で侵入してきたゴブリンを弾き飛ばし、柵の破損個所に突きいられた。

三人はすぐさま荷車の上に固定されている二枚の扉を加工した簡易的な壁を大工道具で固定し、荷車の車輪を外す。

柵の補修を邪魔する為にゴブリンが集まってくるが、見張り塔から矢が次々に射かけられなかなか近付けない、五分もすると土嚢での補強も終わりそれなりの壁となった。

「ローレンさん、壁は今ので終わりだぜ！」

「うむ、状況が整い次第例の手で行く、それまで全員で粘るぞ！」
散らばって柵を挟んでの攻防を再開した男達。皆疲れ、傷も負っているのだが戦意を保ちよく戦っていた。

ここは持ちそうだと確認したローレンは急ぎ砦の周囲を走り皆に状況を伝えていく。

開始直後、ゴブリン達に大きな損害を出すことに成功した砦の防衛戦だったが、三十分ほどが過ぎ、敵が一度後退した後から想定外に組織的な攻撃に曝されることになり、苦戦を強いられていた。

開始直後のように多数のゴブリンが怒涛の勢いで押し寄せ数の力で突破を図る。失敗すれば一度引き、休んでから同じことを繰り返す。ローレンやクロエルそして村人の中にいた辺境守備隊の経験者たちも、その繰り返しになるだろうと意見を一致させていた。

ゴブリンロードに限ればその知力は人間なみに高く、百を超す数の同族を纏めることが出来る。だがその他のゴブリンやホブゴブリン、さらには比較的知能が高く魔法すら使うゴブリンシャーマンでさえも軍隊のように作戦行動は難しいはずだった。

だからこそ通常状態のゴブリン族は数匹〜十匹程度の数でしか巢を作らず、豊富な繁殖力と妖魔でも随一の数を誇るのに人族にとって大した脅威にはならないのだ。

だが二度目の攻撃からゴブリン達の動きは変わった。
十匹ほどのゴブリンが隊列を組み、それぞれ四方から間断なく攻め立てるようになった。

一つの隊の数が減る、あるいは疲労するとすぐに次の隊が入れ換わ

り、戦っていた隊は退却していく。

一度で突破されることはないが、間断なく続く戦闘は砦を守る村人たちの疲労を狙っているとしか思えず、考えもしていなかった作戦を受け中盤戦は苦戦となった。

しかしクロエルの指導で村人たちを四人一組に分けていた為、戦闘中に必ず二〜三組を休ませ、負傷者の多くなつた組や疲労の激しい組と交代させる戦法に切り替えることでなんとか対応することに成功。一進一退の攻防となった。

ただもつとも戦闘力の高いクロエルが指揮と取らなければならなくなつた為、どうしても全体の戦闘力も下がってしまった。その為に柵を越えるゴブリンが現れはじめ、負傷者も増えていく。

戦闘開始から三時間たった今、十一組いた砦を守る村人たちはその数を七組まで減らし、三人しかいない組も二組あつた。

なんとか均衡を保つてはいるものの、状況は悪い。ローレンやクロエルの見る限り間違いなく百匹以上のゴブリンを倒しているのだが、敵はまだまだ多かつた。

柵の周囲にはゴブリンやホブゴブリンの死骸が多数転がっている。

柵から五メートルほどの距離にある堀は本来一メートル程度の深さはあるはずなのだが、堀の底にまでゴブリンの死骸が倒れている為にゴブリン達が堀を越える時間も短くなってきている。

せめて堀が本来の二メートル以上の深さを保っていればより戦い易かつたのだが、百年以上使われていない為土砂が積み上がりその深さは半減していた。土砂で水も上手く堪らず、ローレンたちは堀の本来の使い方は諦めていた。

「ローレン様、そろそろ持ちません」

砦の四方を走り回り柵に取りつくゴブリンを次々に叩き落としていたクロエルがローレンに顔を寄せ告げた。

父に従つてすでに初陣を済ませたというクロエルの戦術眼はローレンよりもよほど確かだ。ローレンはその言葉に頷く。

「うむ、次に敵の交代部隊がやって来た時に仕掛けるとしよう」

「はい、それまでなんとしても死守します！」

怪我こそほとんどしていないクロエルだが、ほぼ休みなく戦い続けている為に誰よりも疲労しているはずだ。しかし軽快に走り行くその後ろ姿から疲れは見えない。ローレンにはそれが頼もしくあったが、村人たちはほぼ全員が彼女を頼りに、寄りかかってしまっている。せめて自分だけは彼女が頼るべき存在となるべきだと強く思う。ローレンの脳裏でクロエルと彼を先輩と呼ぶ女の姿が重なっていた。

過去を思い動きの止まったローレンの耳に、警鐘の音が響く。見張り塔からの新手が来た合図だ。

警鐘の音は四方の見張り塔の全てから鳴っていた。

「敵もここが勝負どころだと見たか…ありがたい」

呟いたローレンは柵の外に目を向ける。そこには確かにこちらに向かい走りくるゴブリンの一隊がいた。他の方向からも同じく砦に向かって来ているのだろう。

ローレンは吟唱棍を地に二度打ちつけ見張り塔の射手に合図を送る。

そしてゴブリンの一隊が堀に近づいてきたところを見計らい再度合図を送ると、十二人の射手が一斉に矢を放った。

それを見たゴブリンたちが棍棒や木の板を体の前にかざしたが、その行動に意味は無かった。放たれた矢は炎の欠片を引きながら堀の中に落ちる。

砦から見守る男達が息をのみその様子を見つめる。だが、なにも起らない。誰かが「ダメか…」呟く声が響く。

「否！ ローレン様、今です！」

沈みかけた空気を切り裂くクロエルの声が響く。そこに深い信頼を感じ、誇らしい想いでローレンは魔導詩を歌い上げる。

“燃え上がり焼きつくす灼熱

暗闇裂き心照らす輝き

汝は全てに破壊をもたらす
汝は全ての再生の糧となる

さあ、赤き翼広げ大空に羽ばたけ
さあ、赤き舌伸ばし大地を走れ“

吟遊詩人がもつとも初めに覚える四つの魔導詩の一つ 赤の交響曲、その効果は火炎を操ることだ。

チュートリアルで覚え、ゲーム中では属性魔法の威力を増やす為に、あるいは減らす為に使用する。

それをこの世界で使うとどうなるのか、思いついたローレンは実験し思うような結果を得ることが出来た。そしてこの作戦を提案した。二つの村から油を集められるだけ集め、堀に溜まっている土砂に全て含ませた。百人以上の生活を支えていた油はかなりの量になったので、火力は十分な筈だ。

堀の中に落ちた火矢の半数はゴブリンの死骸などに刺さり止まっていた。残りの火矢も刺さった周囲に多少燃え広がっていたものの、火力は僅かではなかった。

だが 赤の交響曲 によって火勢は増し、土砂の下に溜まった油に引火。火柱が走る。

堀の上を渡っていたゴブリンたちは驚き逃げようとするが間に合わなかった火柱に飲み込まれ、崩れ落ちる者、火だるまになり転がる者が続出する。

ほんの数秒で砦の周囲には幅二メートルの炎の壁が出来あがっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1126z/>

灰色の吟遊詩人 ローレン

2011年12月31日03時29分発行